

2021. 10. 3. 主日礼拝説教
聖書：ヨハネによる福音書 3章1～15節
『神の国を見るために』

ファリサイ派に属するニコデモという議員が、夜になってから主イエスを訪ねてくるという有名な箇所です。

普通なら夜に来ようが昼に来ようが気にもならないのですが、彼が議員であったという処にニコデモという人の体質が裏打ちされているような気がいたします。

このニコデモという人は、あまり知られてはいませんがヨハネによる福音書にあと二回登場いたします。一回はイエスを議会で遠回しに弁護しようとしたこと、もう一回はイエスの死後、アリマタヤのヨセフが主イエスの遺体を引き取った後に、遺体に塗る香油を持ってやって来たことと記されています。両方とも今日の聖書の箇所と同じように、主イエスを愛し尊敬しながらも全面的に誰はばかることなく表立ってというわけにはいかないような姿を伝えているように感じます。

彼は今の日本でいえばちょうど国会議員のような立場でしたから、その立場上イエスに全面的に従うことが難しかったのかも知れません。そういう意味では複雑な人間関係の狭間を生きる現代社会の私たちと近いところにあった人であるともいえます。

私たちも自分の内にもたくさんのニコデモを見出します。自分の好きなことをしているときは「ニコニコ」していて、そうじゃないときは「デモ～」と言い訳してしまう自分です。そういうニコデモこそ私たちの姿ではないでしょうか。

そのニコデモに主イエスは、「水と霊から生まれなければ神の国を見ることはできない」と言われました。「水と霊」とは何でしょうか。もちろん水と霊とは洗礼の事だと結論づける事も正しいのですが、「霊」(ルーアッハ)という言葉が風とか息という意味を持つことを知る時に、「水と空気」と訳してもハッと気づかされることがあります。

私たちはタダ(実際には水道代は高いのですが)で無限に水と空気が与えられていると考えがちです。しかしこの水と空気なくしてはたちまち死んでしまいます。つまり、私たちの命はタダで無限に与えられている恵みによって内も外

も包まれているのです。

自分の知恵や力だけで生きていると思いやすい私たちですが、実は生かされているのです。パウロは「生きているのはもはやわたしではありません。キリストがわたしのうちに生きておられるのです」(ガラテヤ 2:20)と言っていますし、主イエスも「この霊があなたがたと共におり、これからもあなたがたの内にいるからである」(ヨハネ 14:17)と言われます。

この「生かされている」ということはどういうことなのでしょう。それは自分の力で生きてると安易に自分を認めてしまうことに対する一種のしがめや躊躇のようなものなのではないかと思えます。

自己反省にも似ていますが、反省のように自分で問いと答えを用意して評価するのではなく、もっと自分より高いものの前に自分を据えて、その問いかけに心を傾けようとする働きではないでしょうか。

そして、そのような自分に厳しい作業のことを「霊」というのです。

こうして私たちは、この命が水と空気で成り立っているように、外側からも内側からも神の働きかけと無償の恵みによって生かされているのです。それは「神の国を見るために」与えられた恵みなのです。